研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	河井家文書と日本政治（河井重蔵・弥八を中心に）				
研究組織	代　表　者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山　亮吉
	研究分担者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	森山　優
		所属・職名	千葉大学大学院国際学術研究院・教授	氏名	見城　悌治
		所属・職名	静岡県近代史研究会・会員等	氏名	北原　勤ほか２名
	発　表　者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山　亮吉

講演題目

『河井弥八日記』1939 年より

研究の目的、成果及び今後の展望

本研究は、掛川市に残されている河井家文書を手がかりに、明治期と戦後の日本政治を中央・地方の両側面から多角的に照射し、政治史・地方史における新境地を開拓するものである。

本年度は、『河井弥八日記』1942 年中盤（5 月～8 月）の復刻を中心に活動した

この年は日記に加え、手帳にも詳細な記述があるため、復刻することとした。科研費の他に二回の読み合わせを実施し、現在 8 月過ぎまで作業が進展している。内容は、貴族院の活動が子細に記されており、きわめて貴重である。

特に 5 月は貴族院議員の中支那方面慰問（1937 年の日中戦争の全面化から二年弱が経過）旅行が実施され、大東図書館に保管されている弥八の史料群にも関係書類や写真が存在していることが確認されている。慰問という性格上、病院の状況（入院者数、スタッフの数等）が中心だが、泥沼化した日中戦争の状況を窺い知ることができる。

また、弥八は旅行の際に手帳に書き留め、終わってから日記に清書することを通例としていた。手帳より日記の方の記述が多いのが、この旅行中は逆に手帳の方が記述が詳細である。かつ日記に書き直す際に削除した記述も多いため、弥八のみならず接触があった者たちの心情に迫れる史料として注目に値する。そのなかには、率直な感想を述べる現地の軍人（日本が中国に勝っているのは軍だけで、文化・政治・外交いずれも中国人に劣っており、自分たちが勝っているなどと思うのは粗忽千万、そのような考えでは戦後経営は必ず失敗すると評する憲兵司令官や、軍の尻馬に乗って暴利を貪ろうとする我利的日本人をどんどん取り締まると言う憲兵軍曹）の言も記されており、興味深い。また、弥八は旅行中に世話になった軍人の留守家族に並々ならぬ配慮を示しており（東京近辺であれば足をのばして消息を伝え、遠方であれば手紙と写真を送っている）単なるエスタブリッシュメントの大名旅行には終わらせなかった弥八の人柄が偲ばれる一例である。来年度は校訂を完成させ、出版にこぎつけたい。